

出来事ファイル (No.24-3)

■元町誕生150年を迎える元町商店街

神戸元町商店街連合会 事務局長 中多 英二

昨年の7月に齋藤兵庫県知事と久元神戸市長を顧問に就任頂き、神戸元町誕生150年事業実行委員会(委員長 畑芳弘)を立ち上げました。

1874(明治7)年5月20日に当時の県令である神田孝平が、それまでの西国街道のうち現在の元町エリアを「元町通」と名称を布告した。その当時にも茶店など様々な商店がそれなりに集積していたものと推測されますが、その布告の日を誕生日と定め、元町商店街ではこれまでも100年、130年と節目の年に盛大に誕生を祝ってきました。



150年と云う大きな節目の今回も既にプレ事業として「もとまちwineフェスタ」や150年の歴史を振り返る「元町アーカイブ写真展」を開催。また4月以降には、5月に記念セールを企画すると共に、これからの50年を見据えて新しい商店街のシンボルマークをお披露目する予定。

大正、昭和の1920年代にモゴ、モゴがファッションの新たな時代を切り開いたように、「きのうの元町、あしたの元町」をキャッチコピーに、若手商業者たちで構成される150年事業企画委員会が、元町のあしたを模索し始めた。

150年と云う歴史の上に胡坐をかいていけば、元町の現在のイメージはやがて劣化し、その存在感は希薄化します。若手商業者の皆さんたちは、「変化は鮮度」と元町の新たな魅力創造を模索しています。150年を迎える元町商店街の「あした」に期待したいものです。



栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、2月9日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。



参加者は、(中央区役所)西川芳樹・堀内公、(神戸市都市局景観政策課)西尾俊広、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(佐野運輸)北島幸宏・入山隆寛、(榊神明)羽田成樹、(神明倉庫)十時実希、(兵庫県信用組合)足立英則・高畑諒太・藤本吉英・井上博仁・岡村義忠、(広島銀行)宮原孝輔、(三鈴マシナリー)錦織彬子、(新光明飾)中川俊・藤田直之・西村友博・大森貴美子・田口隆宏、(佐田野不動産)佐田野宏之以上、21名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。

令和6年1月1日に、黒田慶子新神戸市副市長が就任されました。(ご挨拶)市民の皆様命と健康を守り、SDGsの視点を持ち、暮らしの質と都市の価値を高めていくとともに、市民一人一人が幸せを実感できる、温かみのあるゆったりとしたまちづくりに全力で取り組んでまいります。

(お知らせ)令和6年2月2日
会長代行就任 片山泰造副会長
事務局長 退任 岩田照彦 就任 平松日出雄

■もとまちハーバークリーン作戦

2月7日(水)正午12時より、エスタシオン・デ・神戸から8名、ネットヨタ兵庫から19名の方々が、ハーバーロード周辺・きらら広場のクリーン作戦を実施しました。毎月、第1水曜日12時より、地域の企業様有志で実施しております。多くの方々のご参加をお待ちしております。



エスタシオン・デ・神戸のみなさん ネットヨタ兵庫株式会社のみなさん

□読者プレゼント

観覧ご希望の方は、住所・氏名・年齢・本紙への一言を添え、本紙編集部までハガキでお申し込みください。先着順で2名の方にペア招待券をお送りします。

◎特別展「Colorful JAPAN—幕末・明治手彩色写真への旅」

会場：神戸市立博物館 (神戸市中央区京町24番地) 2階南蛮美術館室・特別展示室2・ギャラリー・1階ホール

会期：2024年3月30日(土)～5月19日(日) (前期)3月30日(土)～4月28日(日) (後期)4月29日(月・祝)～5月19日(日) 時間：9時30分～17時30分 (金、土は19時30分まで)

*展示室への入場は閉館30分前まで 休館日：月曜日、5月7日(火) *但し、4月29日(月・祝)と5月6日(月・振替休日)は開館 問合せ先：078-391-0035(神戸市立博物館)



116「WRITING LETTER」 日下部金兵衛 明治時代中期 ビエール・セルネ氏蔵 (通期展示)

◎ブルーナ絵本展

会場：大丸ミュージアム(京都) 大丸京都店 6階 会期：2024年3月13日(水)～25日(月)

時間：午前10時～午後6時30分 (午後7時閉場) *最終日は午後4時30分まで (午後5時閉場) 問合せ先：大丸京都店 TEL:075-211-8111(代表)



1999年『ぼりす そらをとぶ』印刷原稿 Illustrations Dick Bruna © Mercis bv

神戸市楽座 3月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL.361-4523

3月 7日(木)～3月12日(火)甲南大学文化会写真部 写真展 3月14日(木)～3月19日(火)第42回 光彩会

◇元町映画館(有料) TEL.366-2636

2月17日(土)～3月 8日(金) 「カール・テオドア・ドライバー セレクション vol.2」 3月 2日(土)～3月 8日(金)「いまダンスをするのは誰だ?」 「SILENT FILM LIVE【シリーズ22】」 「LONESOME VACATION」 3月 2日(土)～3月15日(金)「ノスタルジア」4K修復版 3月 9日(土)～3月15日(金)「津島 一福島は語る・第二章」 「マリの話」 *以下は終映日未定 3月 9日(土)～「水平線」 3月16日(土)～「戦雲 一いさふむ」・「窓」MADO」 「悪魔ははらわていけにえて私」 3月23日(土)～「すべて、至るところにある」 3月30日(土)～「ピーター・グリーナウェイ レトロスペクティブ 美を患った魔術師」 【予定は変更になる場合がございます。】

みなと元町 TOWN NEWS



発行：みなと元町タウン協議会 住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人：片山泰造 編集人：平松日出雄 電話・FAX：078-391-0831

好きなまち、好きな人たち2

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所 今地 春乃

元町商店街で働き始めて3年が経ちました。地域連携担当としては相変わらずですが、今年度から週半分は連合会の事務局でも働かせていただくようになりました。より広く深く関わるようになり、商店の一人一人と関わる中で思ったのは、違う方向を見ているようで目指すところは同じみたいだということです。そして、改めてわかってきたことを今回はわからないなりに整理してみようと思います。今回は事業部の皆さんにお話を聞いてきました!

人との繋がりがってなんだろ

「人と人との繋がりがってないよ、全然感じない」「喜ぶ顔が直接見えるから嬉しい」「変わっちゃうのは寂しい」「街の人が気持ちよくいられるように気を遣う」

商店街の良さとしてよくあげられる人との繋がりに色々あるみたいです。店と店、店とお客さん、人と人。でも話を聞いてみると、全てがいい面ばかりではないし、実感も人によって違うようでした。その中で確かなのは、「人と人との関わりが小売業の原点」ということです。「コンビニみたいに自動精算じゃないし」「街の賑わいのベースとなる商店街周辺の人口が増え、神戸市内でイベントがある時の来街客も増え、賑わいが生まれている様に感じます」そんなお店の寄せ集めである商店街にとって、人との繋がりはどうしても必要なもの。お客さんをお呼びに行うイベントには街の中の繋がりが重要です。商店街の中の繋がりがお客さんをお呼びするための繋がりがなんだと言ったらそれまでですが、その中で店舗一つ一つの出入りにも嬉しくも寂しくもなるならそれだけじゃないって言えると思います。小さな繋がりが紡がれて、街が続いていました。

みんなにとっての商店街ってなんだろ

「好きなところも、好きじゃないところも人との繋がりが、人情の場所」「ここはオールドタウン。もっと混沌としたい」「少数でもNOといえどNO」「お客様に喜んで頂くために前向きな努力をする店舗の集まり」

商店街はお店が集まる場所。でも、その中でもそれぞれに見えている商店街は違いました。店の入れ替わりが激しいところだったり、新しいお客さんが入りやすい場所だったり、個性なお店が集まる場所だったり、そして少し気難い場所だったり。「ウィンドウショッピングみたいに店に入ってもらえる」商売にとってのメリットだけじゃないところが、商店街らしさかもしれない。30年商店街にいても、「あまり中に入ると変化を感じないね」という方もいて、それは元町商店街が変わらず元町商店街であり続けていることではないでしょうか。世代交代も経ながら変わらないでいることは、商店街であることに合わせて、街の人がここは元町商店街であるという意識をずっと紡いでいるからなのではないでしょうか。

街のためってなんだろ

「できることなんてないよ～」 「ここに在り続けること」 「他の丁のことを知らないよね」 「オーナーもテナントも目指すところは一緒」

いろんな立場の人が、いろんな角度から街に関わっていて、できることできないことの中で日々のまちが形成されています。この街のためにできることだって、それぞれ違って、丁のなかの「目安箱になってる」人は街の中で人を繋いでいるし、「クレームを言うだけの人になりたい」人だって、元町商店街という場所の軸を支えています。全部、今ここにいるから、ずっとここにいるからできることです。その中で、その範囲を自分がいる丁だけで捉えるか、商店街全体で捉えるかが大きな違いになってくると言えます。「他の店に興味ないもん」「他の丁の案内もできるように」大きく見ても小さく見ても街は街、ここが元町商店街であるという意識が紡がれてきたからこそ、いろんな人がいてもバランスが取れているのかもしれない。

また、事業部としての「集客事業は好きなんです、お店の売り上げに結びつかないとは思いますが、人が来てそこで喜んでもらえる事業がしたい」という声は、町のためにという想いではなくて結果的に町のためになっていると思います。お客さんのために、がそのまま町のためになっていくのが商店街の面白さの一つです。

じゃあ、まちづくりってなんなんだ

「一店一店が自分の前だけでも綺麗にしていけばもう少し変わる気がするんですけど」「昔(震災前)に比べて風紀が良くなった気がする」「イベントは、街の再確認」

事業部会の皆さんということもあり、元町商店街にしかない経験をお客さんに届けていきたいという言葉も何度か聞きました。「来街される方にはここでできない体験を沢山して頂きたいです」「いい思い出を持ってもらえたら嬉しい」物にしても人にしても、ここにしかないものを見つけてもらえるようにイベントなどの企画をつくってました。そして、イベントだけでなく、一人一人の意識そのもので街が紡がれていました。店主としてのまちづくりはやはりお客さんをお呼びすることに他なりません。じゃあ、そうではない私としてのまちづくりはなんなんですか。そもそも、まちづくりという言葉の意味もわからなくなってきていたみたいです。

ということでこれ見よがしに「紡ぐ」というワードを使ってきましたが、神戸元町150年!のキーワードが「紡ぐ」だったというわけでした。「紡いでゆく。歴史と伝統と商店主の想い」という言葉が今、商店街にバナーとして掲げられています。でもきつと紡がれている歴史や伝統の太い糸も解していけば店主やお客さんの、元気?今日はどう?みたいなささやかな願いや祈りが細く長く紡がれているんだと思います。皆さんもその糸を紡ぎに商店街に遊びに来て下さい!

その場にいること、訪れることも街の風景を作っていくまちづくりなんだと思います。商店街にある人との繋がりが、そもそも商店街自体も、よく言われる街のためってワードについても、なんだかわからなくなってきたけれど、私が今それでも元町商店街にいるということがこの街のまちづくりにもつながっていると思っていて、もうしばらくここにいたいと思います。



海という名の本屋が消えた（124）

平野義昌

西村旅館(16)

1929(昭和)年2月、3月に西村貫一が寄稿した同人誌「薔薇派(そうびは)」は国立国会図書館に所蔵されているが、デジタル閲覧できない。コピー送付を依頼した。

“Random Thoughts on Books 「書籍」「讀書」「書狂」

貫一寄稿文の前に「薔薇派」のこと。28(昭和3)年1月創刊。編輯兼発行人、西宮市東町二丁目四番地、米谷(こめたに)利夫。同人の他、若き日の井伏鱒二や舟橋聖一も寄稿。伊藤慶之助、北園克衛、小出楯重が描く表紙、扉、挿絵に特色があり、「とくに小出楯重の描いた裸婦は出色」(註1.写真)だった。30(昭和5)2月通巻21号をもって廃刊した。

米谷は1920(大正9)年間西学院中学部卒業、同学院「学友会雑誌」文芸部雑誌編輯員に稲垣足穂(一級上)と共に名がある。米谷は足穂作品「秋夜長物語」(1966・昭和41年発表)に登場する〈米谷子路〉。17(大正6)年に原田の森の校舎が全焼、焼け跡で米谷が本を拾う(足穂は白磁の一輪挿しを見つけた)。後年足穂が佐藤春夫邸寄寓時、米谷が遊びに来て文芸部の話になる。米谷の拾った本が「秋夜長物語」=平安時代の少年愛物語。足穂が貰い受けた。戦後足穂が住んだ伏見桃山から遥か西の西岩倉・金蔵(こんぞう)寺に物語主人公・桂海と梅若丸の供養塔がある。註2

さて、貫一の寄稿は第一編3ページ、第二編2ページと短い。「書物つれづれ」というもの。各編最後に〈「書籍」第一回終り〉〈「讀書」第一回終〉と断わっているので長く続けるつもりだったと思われる。紙数少なく、出典・書誌を明示していない。以下引用はすべて貫一寄稿文“Random～”より。

第一編。ゲーテンベルグの印刷術発明以来、出版物の増加は驚くべきもの、と以後4世紀間の数字をあげる。およそ36万8千点、総部数3億冊超(出典不明)。それ以前の木版本・写本もある。1929年現在の「地球上に存する書籍の部数を想像して御覧」。

〈……私の知人某がよく読むんだと自らも信じ他も許した人でしたがそれですら二万冊を越えたか越えぬかでした。(後略)〉

貫一は「不思議な広い書籍王国の世界」について、有名無名の学者や文士の批評・感想・罵倒・讚美の言葉を書き並べる。アトランダム(デタラメ)ではなくランダム(手当たり次第)に。まず「書籍」の定義。

1755年出版、サミュエル・ジョンソン博士の英語辞典第一版は「吾々が読み又は書く所の冊子である」と説く。

オックスフォード英語辞典には、「数葉以上の紙若くはその他の材料の上に色写若くは印刷された論説の連続であって纏まった一体となるように綴合したものである」。

スタンダード辞書(筆者註、1863年出版“Standard Pronouncing Dictionary”か?)には、「空白であると筆写されてであると将(は)た印刷された物であるとを問わず、紙葉の一定数を綴合したものは之を図書と云うべし、それが使用される目的は限定されて居ない」。

そして、17編の箴言。

1.「限り無い生命を持つ物は書物だけだ」Rufus choate(ルーファス・チョート、19世紀アメリカの弁護士、政治家、以下カッコ内は筆者註)

2.「書物は香気高き霊」 Bovee(クリスチャン・

ネステル・ボヴィー、19世紀アメリカの作家)

3.「書物こそ、いつも欺かざる友」 Pixereecourt(不明)

4.「人類幸福の大部分を作る物は書類なり」フレデリック大王(18世紀プロイセン国王)

5.「よい友達を持ったなら、次にはいい書物を持って」 コルトン(不明)

6.「善い書物を破壊する事は人を殺す事と同じ事だ。人を殺す者は神の子を殺すもので、然かも善良なる書物を破壊する人は道理その物を破壊すると云うものだ」 ミルトン(ジョン・ミルトン、17世紀イギリスの詩人、『失楽園』)

7.「書籍は人類文化の生母である」(記載なし)

8.「書籍はその父親を神格化する不功の子」プラトー(プラトン)

9.「もしお前が書籍から益されようと思ったなら謙抑と信仰心を持って読書なさい、そうしてどんな場合にも俺は深い造詣があると思う虚心をすてよ。最後の審きの日、問題なのは何を此の世で仕たかと云う事で何を読んだかと云うのではない。如何に学者らしい物云いをするかが問題では無くて如何に宗教的に吾々が生きたかが問題なのだ」 トーマス・ア・ケムピス(14～15世紀ドイツのキリスト教思想家)

10.「書籍は神の栄光なり」 書狂ドン・ヴィンセント(19世紀スペイン・バルセロナの修道士)

11.「善良なる一冊の書物は此人生及永遠を特に飾る偉人の霊の生血である」 ミルトン

12.「書籍は笞や木篋で打擲したり、きつい言葉や怒る事もなく其上金も入らず着のみのままて吾々を教え導いてくれる先生様だ、お前が入用の時は、いつでも起きていてくれて、お前が取調べをし度い時は尋ねて御覧、書物は腹蔵なく物語り、お前が誤った解釈してもブツブツ云わずその上お前が如何に馬鹿だっても笑いもしない、なんと結構なものじゃないか」 一四七三年

フィロピフロン(14世紀イギリスの聖職者・政治家・愛書家リチャード・ド・ベリーの著書)

13.(原稿は数字逆さま)「書物を愛する人は忠実なる友も有益な友も愉快な遊び相手も、為めになる慰め相手も要りません、学び読み考える事によってお前を知らぬ間に慰めお前自身を楽しくさしてくれるよ、雨が降ろうと、風が吹こうがどんな境遇にお前があっても構やせぬ」 アイザック・パロー(17世紀イギリスの聖職者、数学者)

14.「私はどこでもいい、気を休ませたいと思つて見るが、扱一冊の小さな書物を手にして一寸した室の隅で休むにしくは無い」 ロングフェロー(ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー、19世紀アメリカの詩人)

15.「野蛮人が自分の鉄砲の威力を敵の退却した事によって決める様に多くの読者は書籍の偉力を自分の心に受ける感動の如何によって判断する。だが、いい書物はなかなか読者にはおいそれとやり込められはしませぬぞ」 ロングフェロー

16.「書物は媚び、へつらわぬ誠の友だ」 ベーコン(フランシス・ベーコン、16～17世紀イギリスの思想家・政治家)

17.桑港(サンフランシスコ)図書館のモットー「蜜蜂の花に対する様に書籍を取り扱っておくれ、蜂は蜜を吸い出すが、その花を傷めはしない」

第二編は〈「讀書」に就て 第一回〉。すべて箴言・格言の引用で、解説なし。

1.「読書に上越す喜なし」書狂、マクリアベッキ(不明)

2.「反響なしに読む事は消化器を働かさずに

食事をする様なものだ」 バーク(18世紀イギリス政治家エドマンド・バーク)

3.「読書ほど安価で楽しい物は無い、その上絶えざる喜びがあるとは」 モンタギュー夫人(メアリー・ウォートリー・モンターギュ、17～18世紀イギリス貴族、外交官の夫とトルコ赴任。現地の天然痘予防接種を持ち帰り普及させた)

4.「読書の習慣は道徳として褒められた事も不道徳として斥罵された事もあったが、読書は道徳にも不道徳にも非ざる家常茶飯である、丁度阿片を喫煙する様に人為的の天国を開いて迎えるが阿片よりは無害である」 アンドリュウ・ラング(19世紀イギリスの文学者、民話蒐集・研究)

5.「よい読書家となれ、これは恐らくは汝が想像するよりは困難ならん、読前に際して弁別心を健全にせよ、汝が真の――想像でない――趣味を持って、汝が読む良い書物を忠実に最善の注意を払つて読め」 カーライル(トーマス・カーライル、19世紀イギリス歴史家)

6.「一定の読書は利益がある、雑駁な読書は愉快である、諸種の著者に対して諸種の本を読むことはそのうちに漠然たる不安定な何物かが含まれて居る」 セネカ(ルキウス・アンナエルス・セネカ、古代ローマの哲学者)

7.「如何なる学問でも利益を得るように研究せんとする人は確実に本を屢々繰り返して読むべきである。多くの書物を読む事は学ぶと言うよりも、むしろ、混雑を招くものだ、恰も至る処に住む人は何処にも安心して住むことが出来ないようなものである」 マルチン・ルーテル(マルティン・ルター、15世紀ドイツの神学者、宗教改革)(原文に番号なし)「読書する時は他人が自分の為めに考えて呉れるので自分は他人の心の行程を反覆しておるのだ、丁度弟子が習字をするに方つて師の鉛筆で書いて呉れた線の跡を準るようなもので読書するに方つては考えると云う事の大部分は人が代つて我々の為めに做つて呉れる、夫故に我々が思索に勞れた時に読書に転ずれば心から吻(ほっ)と息を吐くが、その代りには読書するに方での自分の頭は実は他人の考の領分となっているのだ。(後略、読書は考える事の代わりにしかならず、思索を他人にゆだねる。多読は考える力を弱める)」

ショーペンハワー(アルトゥル・ショーペンハワー、19世紀ドイツの哲学者)

註1 季村敏夫『窓の微風 モダニズム詩断層』みずのわ出版 2010年

写真(「薔薇派、昭和4年12月号)も同書より、

註2 稲垣足穂『月球儀少年』立風書房1988年

他引用は西村貫一“Random Thoughts on Books 「書籍」「讀書」「書狂」”引用文は適宜新字新かなに直した。



みなとMOIOMACHケンチクさんぽ vol.32

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

半世紀前の元町・三宮の都市計画

私事で恐縮ながら、少し半世紀以上昔の事を思い出してみても、現在の街を感じてみます。芦屋で生まれ育ち、京都で学び、大阪で修業の時代を過ごしました。設計事務所に勤めて数年経ち、神戸に支所を出そうという事で私と数人が指名されました。当時は暇があると神戸に向かって元町からセンター街等歩き廻っていました。「神戸はトアロードが一番の魅力!」と主張した覚えがあります。トアロードには今もある神戸の歴史を物語る名店が軒を連ねていました。

「れんが亭」という店がトアロードにあり、そのお隣に神戸支所が出来たのが52、3年前の事でした。その場所は「サントノーレ」という(後年ライブの店として有名になりますが)小さな店が1階にあったビルの3階でした。数年後、手狭になり元町駅近くのビルに引越す事になりましたが……。

この頃は元町、三宮の街づくりの大きな変革時期であり、元町商店街の西端にあった三越百貨店が商店街の中に一部アパレル部門の店を残し後は店仕舞し、少し寂しくなりつつありました。反面、三宮ではサンチカ、センター街等の隆盛が顕著となり、商業の分化が進みつつある時期になっていました。しかし、元町商店街は依然として旧くからの神戸を代表する名店が軒を連ね、高い品位を保っていました。又、戦後30年を経てその当時は戦災復興区画整理事業が仕上げの段階に入っていました。市内全域でその地区の特性も加味した換地計画のもとに計画道路、公園等の整備を目的として事業が進捗を見せていて、権利者にとって25%、20%の土地の減賦は大きな痛みを伴い、その上余剰の予備地の再買取に大きな負担を強いられた結果となりました。

区画整理事業は高度利用を計るべき商業中心地では単独での施行は難しく、市のプランに添いながら、市街地改造事業、防災街区造成事業等の面的な開発との合併施行が進められ、特に防災街区は神戸市内で各所盛んに行われてきた経緯がありました。中でも元町、三宮では市街地改造事業としてフラワーロードとトアロード側からサンプラザビルを皮切りにセンタープラザ東、西館迄数年がかりで完成されました。

西地区には大きな市場があったり、全体としてテナント依存とする官成の市街地改造という再開発でした。行政が土地等の権利を買収して、その評価に応じて各権利を変換の上再配置する。ある意味では権利者にとって負担の少ない手法でした。問題は完成後にテナント撤退等と膨大な管理費の

負担等、事業者にも権利者にも大きな問題点がありました。これとは異なった手法によって民間主導、権利者主体で進めなくてはならなかったのがセンター街対南側の商店街でした。こちらは区画整理による道路後退2.0mを含みながら行政の援助があるものの権利者が自身の手で進めざるを得ませんでした。このように民間による施行のセンター街南東側ブロックは大規模な権利者がまとまって存在し早期に完成、北側サンプラザ付近と繋がる2層のダブルデッキと称するペテストリアンデッキによる立体的な動線が当時は話題となりました。

京町筋から西側は中間部生田筋あたり迄は防災街区造成事業としてのまとまりを完成され、テナント誘致も決まり区画整理と共に完了しました。

そのあたりから私の関わりのあるエリアに進んでくるのですが、何といても区画整理による換地は面的な整備は単独あるいは隣地間だけでは納まりません。その街区ブロックが全体に同時に動かないと進めません。パズルのように動く必要があります。前述のようにセンター街の道路拡幅の2mを供出するにしても当時でも¥2,000万円/坪の相場があり、その上位置によって予備地の買収にも膨大な資金を要すところで、合意形成には長い時間を要しました。最終的に生田筋からトアロード迄のブロックの西半分に関わることになりました。全体として組合を作って共同化という組織には到りませんでした。しかし乍ら幾人かの共同化グループと比較的大きな単独権利者に分かれて配置が出来、私の方でブロック全体の推進協議会のようなものを作り進めることが出来ました。

今から40年程前の事でした。こうして躯体のみ共有する形で内部は自由に作れるという平均的には地上5階地下1階建程度の数軒の共同化まとまりで完成しました。



40年前に関わったセンター街の街並み

各々の権利者の自律的に利用できるブロックが出来、対側の大規模再開発ビルとの単純に比較は出来ません。運営の自由度、管理費の負担のメリットは大きいと感じ

ました。完成して10年程経ってみると建築時の店舗は7割方なくなり見事に神戸の大手アパレルメーカーのアンテナショップの連続となった時期がありました。勿論権利者は変わらずに借家等としてたのでしょうが現在は類型時には表現しにくい構成の時代の先端をいく店舗が展開しています。

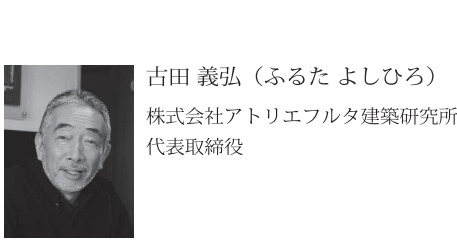


現在のセンター街

半世紀に亘って再開発のエリアを見て来て、またこれからの再々開発を目前にしてこれから歴史がどんな評価をしていくか見守りたいと感じています。震災前後からトアロード、大丸百貨店とその周辺の栄町のブランド店舗の展開には目を見張るものがありますが三宮に限らず元町においてもアーケード商店街の現在はかつての風格のある個性的な雰囲気が薄れ、全国の主要都市の駅前商店街に見られる混沌とした様相を呈してきているような気がします。それと比べてこれらのアーケード商店街の周辺の自然発生的に形造られてきた新しい界限の親しみやすさ、街並みには魅力があふれて来ています。青空がまずは一番、店の自由な構え「角を曲がるとどんな景色がある?」という楽しみ等……。センター街本通り商店街を抜けた街区、乙仲通の街並等、これからの展開には大いに期待が膨らんで来ます。



センター街の南の細街路に設計した建物



古田 義弘 (ふるた よしひろ)

株式会社アトリエフルタ建築研究所 代表取締役